

「中村地平と台湾」

一般財団法人台湾協会評議員（台湾文学研究家）

河原 功

目次

- はじめに
 - 一 台北高校時代の中村地平
 - 二 新進作家としての中村地平
 - 三 真杉静枝との同棲
 - 四 台湾への取材旅行
 - 五 台湾に取材した作品
 - 作品紹介1―「蕃界の女」
 - 作品紹介2―「霧の蕃社」
 - 作品紹介3―「蕃界近き村」
 - 作品紹介4―「長耳国漂流記」
 - 作品紹介5―「花多き島」
 - 作品紹介6―『あをば若葉』
 - 六 地平にとっての台湾
 - 七 中村地平の不可解な言動
 - (一) 中学卒業後の一年間
 - (二) 台北高校受験の動機
 - (三) 長篇小説『あをば若葉』の謎
- おわりに

中村地平と台湾

河原 功

はじめに

宮崎県出身の作家中村地平（本名・治兵衛^{じべえ}、一九〇八—一九六三）は、芥川賞候補に二度もあげられた（戦前は「土龍^{もぐら}どもぼつくり」と「南方郵便」で二度、戦後は「八年間」で一度）が、これまで研究対象にされることはほとんどなかった。

それでも、森永国男『太宰と地平』（鉾脈社、一九八五年四月）、岡林稔『《南方文学》その光と影 中村地平試論』（鉾脈社、二〇〇二年二月）、阮文雅「中村地平「華僑たち」に描かれた日本軍の虚像」（『植民地文化研究』第二二号、二〇二四年二月）がある。さらに、蜂矢宣朗『南方憧憬—佐藤春夫と中村地平』（鴻儒堂出版社、一九九一年五月）、拙著『台湾新文学運動の展開—日本文学との接点』（研文出版、一九九七年一月）もあるが、地平が台湾と深く関わっていたこと、地平の作品の中核をなしていたのが台湾だということに注目した研究は非常に少ない。

一 台北高校時代の中村地平

宮崎県立宮崎中学校を一九二五年に卒業した中村地平は、翌一九二六年に台湾総督府高等学校（一九二七年に台湾総督府台北高等学校と改称）の高等科（文科甲類）に第二回生として入学した。

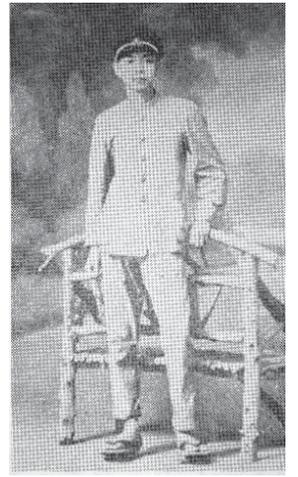
旧制の高等学校は、卒業生の99%は大学に進学するという、エリート青年の在籍する学校だった。

官立では、「ナンバー校」と称せられた第一高等学校（東京）に

始まって、第二（仙台）、第三（京都）、第四（金沢）、第五（熊本）、第六（岡山）、第七（鹿児島）、第八（名古屋）の八校と、「地名校」である弘前、山形、新潟、水戸、松本、浦和、東京、静岡、松江、大阪、姫路、広島、山口、松山、高知、福岡、佐賀の一七校が設置された。公立では府立、富山、浪速の三校が設置された。また、台湾総督府所管の台北高等学校、関東局所管の旅順高等学校があった。私立では成蹊、成城、武蔵、甲南の四校が設置された。合計すると高等学校は三四校であった。さらに、帝国大学入学資格が高等学校と同等なものとして認められた学校に北海道帝国大学予科、京城帝国大学予科、台北帝国大学予科、それに私立では学習院高等科の四校があった。

その中で七年制（四年間の尋常科十三年間の高等科）の高等学校を設置していたのは、官立では二五校のうち東京高等学校ただ一校、公立では府立、富山、浪速高等学校の三校すべて、私立では成蹊、成城、武蔵、甲南高等学校の四校すべて、それに台北高等学校を加えての、合わせて九校だった。

高等科は文科と理科とに分かれ、甲類は第一外国語が英語（第二外国語は独語）、乙類は第一外国語が独語（第二外国語は英語）となっていた。授業時数の40%は語学だった。異色なのは東京高校で、最初の官立七年制高校として一九二二年に発足、一九二五年に高等科に文科・理科とも甲、乙、丙（第一外国語が仏語）三類を完備した唯一の高校となった。



中村地平
(台北高校時代)

中村地平が日本内地の高等学校に進学せずにわざわざ台湾の高等学校を選んだのには、佐藤春夫(一八九二—一九六四)の作品を読んでの影響が大きかった。

佐藤春夫は、郷里和歌山の新宮に帰省中に、偶然新宮中学時代の親友東熙市と邂逅する。東は台湾打狗(後の高雄)で齒科医院を開業していて、台湾に戻るにあたって春夫を誘ったのだった。結局東の勧めで春夫は一九二〇年に台湾を訪問、滞在三カ月及んだ。台湾各地を巡っての体験から春夫は童話「蝗の大旅行」(『童話』一九二一年九月)、原住民伝説に取材した小説「魔鳥」(『中央公論』一九二三年一二月)、日月潭紀行に絡んで涵碧楼(旅館)の哀れな女人の物語を織り交ぜた小説「旅びと」(『新潮』一九二四年六月)、サラマオ蕃事件直後の霧社に入山した際の体験をもとにした小説「霧社」(『改造』一九二五年三月)、台南の安平を舞台にした異国情調溢れる春夫の代表作「女誠扇綺譚」(『女性』一九二五年五月)などを発表していった。地平は春夫のそれら台湾に取材した作品に魅入られ、台湾への憧憬を抱いたのだった。

また、台北高校では日本内地からの生徒を受け入れるために、福岡での受験会場も設定されたこと、数学の苦手な地平にとって受験科目に数学がなかったことも、台北高校への受験を決断させる要因でもあった。随筆「三等船客」(『仕事机』筑摩書房、一九四一年三月)で地平は次のように記している。

幼い頃から南方に強く心をひかれてみた僕は佐藤春夫氏の「女

戒扇奇譚」や「旅びと」など、台湾を題材にした小説のいくつかをよむと、矢も楯もたまらない気もちになった。九州のM中学を卒業すると、ひとつには入学試験に数学もなかったところから、僕は台湾の高等学校を受けた。

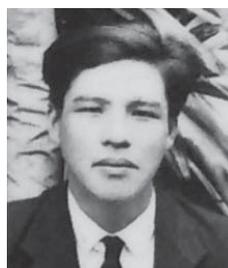
台北高校に入学した地平は、塩月起、濱田隼雄、土方正己、鹿野忠雄らの友人に恵まれ、初代校長三澤糾、第二代校長下村虎六郎(後に『次郎物語』の作者下村湖人)、林原耕三(英語、俳人)や杉山産七(ドイツ語)などの教授から文学指導も強く受けた。ことに杉山教授からは、小説の出来がよい時にはビールを飲ませてもらったという。



三澤糾校長



下村虎六郎校長



杉山産七教授

地平は在学中に、濱田隼雄、塩月起、今澤正雄、蔭山泰敏、土方正己ら六人で一九二七年二月に同人誌『足跡』を創刊した。表紙絵は塩月起の父桃甫(本名・善吉)画家、台北高等学校図画教師)の描く、真っ赤な地に芭蕉の樹という斬新なものだった。地平は、この『足跡』に台湾の高等学校へ旅立つ不安な心境を綴った「首途」(創刊号、一九二七年二月)、台湾の若き小学校教師の悩みを扱った「或宵の尾寺」(第二号、一九二七年五月)、山陰の漁村を舞台にした「浦」(第三号、一九二八年三月)等を発表。同人誌『足跡』は第三号(一九二八年三月)をもって終刊となった。『足跡』創刊から終刊にいたる経緯については、濱田隼雄が「三步で消えた「足跡」」(『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月)で詳述している。



『足跡』創刊号



『翔風』第7号

『足跡』が終刊してからの地平は学友会誌『翔風』と深く関わり、第六号（一九二八年一月）と第七号（一九二九年二月）では編集兼発行人となる。『翔風』を舞台にして「発狂」（第六号）、「天理教」（第七号）、「僕の場合」（第八号、一九二九年一〇月）といった小説を発表する。これらの習作を発表することで、地平は文学的素養を磨いていった。また、短歌会にも属して、「雲走る畑に起き出で一総の葡萄ちぎれりこの朝はじめて」（第六号）、「暗うなれる池面に木の葉漂へり昼寝せし間に風さへ立ちて」（第七号）といった短歌も発表する。書評「ゴリキイの「母」（第八号）も発表している。『翔風』との関係は卒業後にも及び、良鱒一の筆名で創作「廃れた港」（第九号、一九三二年一月）を寄稿している。『翔風』は台北・南天書局からの復刻版で容易に見ることができる。

一九二八年一月、台北高校では第一回記念祭が開催された。装飾教室の公開、文科理科対抗競技、菊花展覧会、山岳展、人形絵画展などは台北高校校内で実施された。映画会、音楽会、演劇は、まだ講堂がなかったため、台北駅前の鉄道ホテルで開催された。劇の公演は記念祭の最大の呼び物で、定員五〇〇名の演舞場に延べ二三〇〇名を集客する盛況ぶりだった。上演後、台北帝大教授矢野峰人（本名・禾積 英文学、詩人）の絶賛を得たという。記念祭の詳細は、『翔風』第七号に収録された総務部「学友会報告」や富安虎太「記念祭演劇評」に詳しい。

このとき、地平は、所属する文科二年甲類の演劇公演のため、ダンセニイ作「山の神々」(The Gods of the Mountain)の脚本を書いた。ダンセニイ (Lord Dunsany 一八七八—一九五七) はアイルランドの男爵で小説家、軍人でもある。一二歳の時に父親の死去により爵位を継承した。成人後はイギリス陸軍に入隊、一八九九年に南アフリカでの第二次ボーア戦争に従軍、第一次世界大戦ではフランスなどへ出征した。作家としては一九〇五年の『ペガナンの神々』の自費出版に始まる。戯曲「山の神々」は一九一一年初演、七人の乞食が山にまつられた神々になりすまして施しを得ようとするところから始まる物語である。

一九二九年一〇月の第二回記念祭で地平は、脚本部の責任者も務めた。演劇の会場は、新築となった台北高校講堂だった。初日二七日の劇公演はジュール・ロマン「アメデと靴磨台上の諸君」（理科一年乙類）、有島武郎「ドモ又の死」（文科一年乙類）、ゴオリキイ「どん底」（七星寮）、翌二八日の公演はル・メルデン「炭坑夫」（文科二年甲類）、金子洋文「息子」（文科一年甲類）、北村壽夫「怪しい貨物船」（理科二年乙類）で、どれも社会派劇と呼ばれるものだった。一九三〇年一月に、林芙美子（一九〇三—一九五二）、北村兼子（一九〇三—一九三一）、望月百合子（一九〇〇—二〇〇二）、生田花世（一八八八—一九七〇）ら一〇名が婦人毎日新聞社主催の「婦人文化講演会」の講師として台湾を訪れた。講演会は一月五日から一五日にかけて、台北から屏東までの九カ所の都市や地方で行われた。講演会場はどこも盛況だったと報じられたが、講演は厳しい言論規制と監視態勢のもとで実施された。地平たち文芸部でも、日時是不明だが、林芙美子の歓迎会を開催した。

また、地平は、彼女たちの宿泊する旅館「吾妻」を訪ね、林芙美子と生田花世を台北市街に案内したことがあった。林芙美子から「どこもありふれている。台湾らしい変わった所、台北にしかないびつ

くりするような場所へ連れて行ってよ」と言われ、同級生の佐藤哲男と相談の結果、彼女たちを案内したのが、施乾（一八九九—一九四四）が一九二二年に設立した「愛愛寮」だった。乞食の収容施設で、その臭気と異様な光景、彼女たちにすがりついてうめき声をあげる乞食に、二人は悲鳴を上げて逃げ出した。顔面は蒼白となり、引きつっていた。彼女たちのそれまでの勢いは一気に喪失したという。この一件は、佐藤哲男「地平さん」（『火山地帯』第四七号、一九八一年七月）に詳しい。

生田花世の随筆「台湾に寄せる感想」（短歌中心の文芸誌『台湾』創刊号、一九四〇年四月）でも、林芙美子と一緒に「訪ねて来た一人の日本青年の案内で萬華の龍山寺を参詣し、そこから中歩き、乞食を収容してある愛々寮の中をずっと見た」という一文がある。一〇年前の衝撃的だった出来事を生田は忘れずにいるのだった。その青年とは、台北高校生だった中村地平のことである。

地平の台北高校生活が充実したものだっことは、半ば自伝小説とも言える書下ろし長篇小説『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）から十分うかがうことができる。佐藤哲男もまた、『蕉葉の章』（作品集『蕉葉の章』、一九九六年四月）で地平（作中では「野村」）を登場させて、学友たちとの交友を描いている。

二 新進作家としての中村地平

一九三〇年、地平は台北高校を卒業（一年留年したので第三回卒業生）、東京帝国大学文学部美術史料科に入学する。在学中から井伏鱒二（本名・満壽二 一八九八—一九九三）に師事、太宰治ら若い作家仲間との交友も深まる。

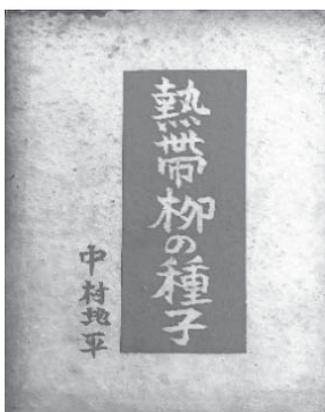
一九三二年一月には津村秀夫、弟の信夫、植村敏夫と同人誌『四人』を創刊する。津村秀夫と植村敏夫は七高時代の仲間、地平と植

村とは同郷の友人だった。同誌に地平は、台湾と縁のある作品「鯨の Copulation」（第一号、一九三二年一月）、「廃港淡水」（第二号、一九三二年二月）、「白雲がなぜ窪地のうへに懸たなびいてゐるか」（第三号、一九三二年四月）、「南海の紀」（第五号、一九三三年一月）を発表する。同人誌『四人』は第五号をもって終刊となった。

この間に地平は、台湾での下宿生活の一端を扱った「熱帯柳の種子」（『作品』一九三二年一月）を井伏鱒二の斡旋で発表する。これが佐藤春夫に評価され、地平は新進作家として文壇に認められるようになる。



中村地平
（東京帝大時代）



『熱帯柳の種子』
（版画荘、1938年3月）

一九三四年に美術史料科を卒業した地平は大学院に進学したものの、間もなく大学院を退学する。台北高校時代の友人土方正己の紹介で都新聞社（現東京新聞）に入社、編集局文化部に所属、そのかわら文学活動に勤しむ。翌三五年には『日本浪漫派』同人に参加、三六年に都新聞社を退社して創作に専念する。そして、「土龍もぐらどもぼつくり」（『日本浪漫派』一九三七年五月）で第五回芥川賞候補（一九三七年上半期）となり、「南方郵便」（『文学界』一九三八年四月）でも第七回芥川賞候補（一九三八年上半期）となる。いずれも南九州を舞台にした創作で、南国的牧歌調の漂う作品だが、芥川賞受賞には届かなかった。

さらに第八回芥川賞（一九三八年下半期）では、「離れ島にて」（『文

芸』一九二八年二月)が予選候補に上げられた。「離れ島にて」は、人を踏み台にしてエゴイステイックな生き方を送る台北高校時代の友人を冷徹な目で見つめる作品である。

芥川賞の受賞には届かなかったが、地平は太宰治、小山祐士とともに「井伏鱒二門下の三羽鳥」と称せられ、中堅作家としての地位を得る。

太宰治(本名・津島修治 一九〇九—一九四八)は青森県津軽の生まれ、弘前高校卒、東京帝大文学部仏文科に入学するも後に除籍。井伏鱒二に師事した。「逆行」(『芸芸』一九三五年二月)で第一回芥川賞候補(一九三五年上半期)に選ばれたが、受賞を逃した。受賞したのは石川達三「蒼氓」(『星座』一九三五年四月)だった。

小山祐士(一九〇六—一九八二)は広島県福山市の生まれ、慶応義塾大学法学部卒(一九三一年)。在学中は小山内薫に私淑、卒業後は井伏鱒二、岸田國士に師事した。戯曲『瀬戸内海の子供ら』(白水社、一九三五年二月)で第二回芥川賞候補(一九三五年下半期)に選ばれたが、戯曲は対象外ということで受賞にいたらず、第二回芥川賞は「受賞作なし」となった。だが、選考委員会では『瀬戸内海の子供ら』が最も高く評価され、小山は劇作家としての地位を確立した。

芥川賞を獲得することは、文壇への登竜門として最高の榮譽であった。初期の段階から、芥川賞には新人作家の心を躍らせ、あるいは乱すものがあつた。太宰は選考委員の佐藤春夫宛に、長さ四メートルの巻紙に毛筆で「芥川賞をぜひ下さい」と哀願する長文の手紙を出した。

作家の城夏子(本名・福島静 一九〇二—一九九五)は、地平の口から「芥川賞、僕欲しいなあ。貰わなきゃあ」と発せられたのを「学生服の地平さん」(『中村地平全集2 月報』皆美社、一九七一年四月)に書き残している。

島尾敏雄(一九一七—一九八六)は、「芥川賞にもれて中村地平は声をあげて泣き太宰治は錯乱したといううわさ」を耳にしたことを「宮崎の中村地平さん」(『中村地平全集3 月報』皆美社、一九七一年七月)に書き記している。

そのいっぽうで、「歌と門の盾」(『作家精神』一九四〇年三月)で第一回芥川賞(一九四〇年上半期)に選ばれた高木卓は受賞を辞退、その結果第二回芥川賞は「受賞作なし」となった例もある。しかし、芥川賞は授賞せずとも、芥川賞候補となったことで、文壇で評価され、優れた作家は多い。芥川賞を獲得したものの、埋もれていった作家も少なくない。

三 真杉静枝との同棲

一九三四年に都新聞社に入社した地平は、程なくして七歳年上の真杉静枝(一九〇一—一九五五)と同棲を始める。地平が真杉と縁を持ったのは、一九三〇年一月に林芙美子らの歓迎会を台北高校文芸部が催した折に、林芙美子から台湾出身の真杉の作品を知らされて以後真杉と文通するようになったのが始まりだった。真杉の父千里が台湾南部で神社の宮司であったことで、真杉は少女時代を台湾で育った。台湾での生活体験を共有していたことが地平と真杉を接近させた一因と言えよう。しかし、二人の関係は数年間だった。



真杉静枝

真杉と親交の深かった円地文字えんちふみこ（本名・圓地富美 一九〇五—一九八六）は「真杉さんの愛情行路」（『旅よそい』三月書房、一九六四年一月）で語っている。

「中村氏との新井葉師時代の生活は、真杉さんの生涯を通して一番謙遜な、一番清潔な時ではなかったかと思える……（中村さんは）両家育ちの気弱いお坊ちゃん風の人で、両親や兄弟との関係も濃く、真杉さんと愛しあっても一恐らく真杉さんの情熱に動かされて同棲したのであるうが—思いきって結婚を発表する勇氣はなかったらしい。真杉さんの方ではそれを強く望んでいたので別れるのも容易でなく、四五年の間ずるずるに同棲生活がつづいた。しかし、中村さんと結婚したい意志の強い間、真杉さんはかなりの世話女房にもなったし、中村さんの文学の仕事にも最大の敬意と愛情を捧げているようだった。」

また、講談社で『小説現代』『群像』編集長を経て文芸出版部長、文芸局長、取締役を務めた大村彦次郎はその著書『荷風百閒夏彦がいた—昭和の文人あの日この日』（筑摩書房、二〇一〇年八月）で語っている。

「（地平が）七歳年上の女流作家真杉静枝に押しかけられ、いつのまにか同棲するようになったのも、南国育ちらしい彼の人の好きからだった。（中略）二人の同棲生活が始まると、一軒の借家に地平が階下に、真杉が二階に暮らした」

武者小路実篤、中村地平、中山義秀と遍歴を辿った真杉に対する文壇の評価は、石川達三『花の浮草』（新潮社、一九六五年八月）や林真理子『女文士』（新潮社、一九九五年一〇月）でも描かれており、実に冷淡だった。北原武夫は、繊細に見えながら神経の粗っぽい真杉に地平は閉口し失望していたようだ。「地平さんのこと」（『中村地平全集2 月報』皆美社、一九七一年四月）で記している。

いっぽう、真杉を好意的に評した作品は、十津川光子『悪評の女』（虎見書房、一九六八年一月）くらいしかない。また、地平と親しかった恩師松村一雄（台北高校教授）が、真杉との同棲は地平の作家生活を側面から応援するものだったと、「川端の宿」（『中村地平全集3 月報』皆美社、一九七一年七月）で述べているのは貴重な証言だ。地平と真杉との同棲については、真杉の作品「小魚の心」「ながれ」「ひなどり」などに散見でき、地平の「八年間」（『群像』一九五〇年一〇月）や「発端」（『ポリタイア』一九七一年二月）などからも窺い知ることができる。

四 台湾への取材旅行

地平は、惜しくも芥川賞を逃したことで失意、太宰との不和、ほどなくして真杉との同棲生活の行き詰まりもあって、スランプ状態にあった。

地平はスランプ状態からの脱出をはかりたい、作家として更なる飛躍を遂げたいと、一九三九年に取材旅行として台湾各地を訪れる。これは拓務省の肝煎りで出来た「大陸開拓文芸懇話会」の一員として実現したもので、地平にとって台北高校卒業以来一〇年ぶりの台湾再遊だった。真杉静枝も同道していた。三月八日、二人は大和丸に乗船、甲二等の一室に落ちつく。台湾での静枝は病気の母を見舞うために嘉義に向かった。

地平の台湾滞在は三月一〇日から四月八日までの約一カ月（真杉の台湾滞在中も約一カ月）だった。台湾到着の翌二日に明治製菓で、おやま小山捨男・須藤利一・松村一雄教授も出席しての台北高校新聞部・文芸部合同の中村地平歓迎会が開催された。台湾を離れる間近の四月四日には、台北高校会議室で文芸部主催の中村地平講演会が開催された。詳しくは「学内ニュース」（台北高校新聞部『台高』第一三三号、

一九三九年六月）が報じている。

四月五日には、ラジオで「南へ寄する心」と題して二〇分ほど、台湾での感動と、それに関連する南方的な文学について講演を行った。

地平は一四日間を台北で過ごし、一六日間を台湾一周に費やした。地平の訪れた地域は多く、「板橋、台中、彰化、鹿港、日月潭、霧社、台南、安平、高雄、屏東、サンティモン社、恒春、四重溪、ガランピ、高士佛社、知本温泉、台東、吉野村、花蓮港、タロコ等の町や、名所などを見て歩いた」と、また、「僕は一文学書生としては、分に過ぎるほどの便宜を各方面から与へられた。汽車、バスの無料パスが給与されたし、各地方庁の大半から自動車を出して貰った。視察に必要な場合は案内人もつけて貰った」と、「旅びとの眼―作家の観た台湾」（『台湾時報』一九三九年五月）で記している。地平は、一九二〇年に台湾を訪れた佐藤春夫が下村宏民政長官のはからいで役所から数々の便宜と歓待を示してもらったことを思い起こしたことだろう。

芥川賞受賞に今一つ届かなかった地平の心を癒すこの台湾旅行は、よきカンフル剤だった。台北高校での恩師や後輩たちとの交友もあり、充実した台湾訪問だった。東京に戻って二日後には、地平は台北高校生に向けて、その感動を綴っている。「若い友達へ」（『台高』第一三号、一九三九年六月）で、「僕自身も、台湾に在る高等学校で学んだことに、十分の誇りと、自信を持つてゐる」と記している。

地平は今回の台湾再遊で「小説的な材料は実に無尽蔵である」、「台湾はわれわれ小説家にとつては全く未開拓の処女地である。台湾旅行はスラムプに陥ち入つてゐる小説家にとつては、案外起死回生の妙薬かもしれない」（『旅びとの眼』『台湾時報』第二三四号、一九三九年五月）と、収穫の多かつたことを述べている。

五 台湾を題材にした作品

地平はこの台湾訪問をもとに、「蕃界の女」（『文芸』一九三九年九月）、「霧の蕃社」（『文学界』一九三九年十二月）、「蕃界近き村」（東京・満洲移住協会『新満洲』一九四〇年二月）を発表する。そして、「南方的な文学が持つ多くの美点」を認識した地平は、彼自身が考えている文学の指標として「南方文学の樹立」（中村地平「南方的文学」、「知性」一九四〇年九月）を掲げ、長編小説「長耳国漂流記」（『知性』一九四〇年一〇月〜四一年五月）の連載を開始する。地平は「本島人の生活も旅の心をひくが、それよりもっと興味があるのは蕃人のそれである」（『台湾の風物』『海』大阪商船、一九三九年一〇月）と述べており、地平の関心は原住民に向けられていたため、原住民を題材とした作品が多い。

そのいっぽうで、台湾の女学校を舞台にした連載小説「花多き島」（『少女画報』一九三九年一月〜）、台北高校を舞台とした書下ろし長篇小説『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）もある。青春時代への回帰からだろうか。なお、『あをば若葉』は陸軍報道班員としてマレーに派遣されている一九四二年に出版されたが、「花多き島」は戦後になつてから『白百合先生』と標題を改めて一九四六年にやっと出版された。

作品紹介1―「蕃界の女」

「蕃界の女」（『文芸』一九三九年九月）は、旅人の由谷三吉（絵描き）が知本温泉で知りあった山名（小説書き）とともに東海岸沿いにバナナ、ピナン、吉野、花蓮港を旅行して、タロコのタツキリ館に着いた所から始まる。三吉は、東京で「ある女と不仕合せな結婚生活を営んでゐる」ため、そこから逃れるために台湾を訪れた。

一方、山名は台北高校卒、東京に住み、一〇年ぶりの台湾再遊だった。三吉も山名も地平の分身ということになる。二人は近くの「蕃社」(原住民部落)を訪ねる。そこで「蕃婦」(原住民女性)シバル・イワルと出会い、瓢箪や布織物を買うが、そのやり取りはおもしろい。夜にまた、今度は米酒を土産に提げて頭目の家を訪ねる。イワル、その夫、頭目の三人が米酒を奪いあう光景、彼らの話のやり取りなどを、三吉は微笑ましく受け止めている。

ところで、「蕃界」「蕃社」「蕃婦」と言い方は、当時は問題視されなかったが、「蕃」は「生蕃」「蕃人」とともに台湾原住民族を指す蔑称である。



『蕃界の女』
(新潮社、1940年5月)

作品介绍2ー「霧の蕃社」

「霧の蕃社」(『文学界』一九三九年一二月)は、霧社事件をテーマにした小説。

霧社事件は、一九三〇年一〇月に台湾中部の山地「霧社」で勃発した原住民の武力蜂起事件で、日本人一三四人が惨殺された。台湾人犠牲者はわずかに二人、日本の着物を着ていた者と流れ弾に当たった者、したがって明らかに日本人を対象とする武力蜂起であった。霧社の人口が最多となる、年一回の霧社小学校と公学校の合同運動会当日を狙って決行したもので、開会式前までには付近の駐在所が次々と襲われていた。原住民蜂起の情報が事前に漏れることな

く、周到に計画された蜂起であった。

蜂起の原因は総督府の「理蕃政策」の欠陥によるものだったが、原住民を統治する山地警察官の横暴や無理解など数多いものだった。首謀者はマヘボ社の頭目モーナ・ルダオ、蜂起に参加した村は「霧社蕃」一社のうち六社(二三六人)。事件の鎮圧には警察だけでは不可能と判断され、即座に台湾軍に出動命令が下されて、山砲による砲撃、飛行機からの爆弾投下、国際法で禁止された毒ガスも散布された。最前線には「味方蕃」(蜂起に加わらなかった原住民)に武器弾薬を与えて、蜂起した「反抗蕃」を攻めさせた。そして、「味方蕃」には、殺害した原住民にに応じて賞金を与えていった。頭目や勢力者は高額だったが、子供を殺害しても賞金は支給された。霧社事件は海外でも報じられ、日本の帝国議会でも論議され、石塚英蔵台湾総督の更迭にまで発展した。

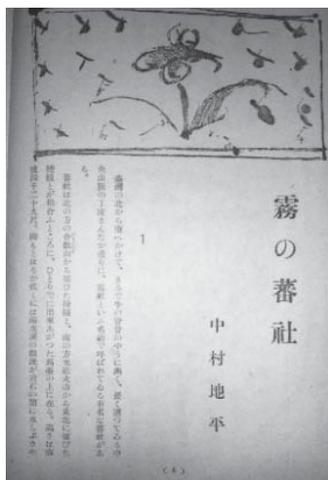
霧社事件をテーマにした小説は数多いが、その最初は地平の「霧の蕃社」だった。執筆には、水越幸一(事件勃発当時の台中州知事)から話を聴く機会が幸いしたという。だが、「霧の蕃社」の発表は、事実の多くが隠蔽されていたこともあって、霧社事件の詳細は語られていない。総督府の公式発表「霧社事件の顛末」の域を出ていない。

さらに、事件鎮圧後に「味方蕃」から武器弾薬をスムーズに回収するにあたって、警察官黙認の上で「保護蕃」襲撃をさせるという「第二霧社事件」もあった。「保護蕃」とは投降した原住民のこと、女性や子供が多くを占めていた。これによって、「反抗蕃」六社の原住民は一二三六人から二九八人に減少した。そして、わずかに残った「保護蕃」は、霧社から遠く離れた川中島(現・清流)に徒歩で強制移住させられ、警察の厳しい監視下のもと、限られた狭い場所で生活することになった。しかし、蜂起に加わった者のあぶり出しは続き、処刑された原住民は少なくなかった。また、平地での生活に慣れず自殺したもの、病死した者もいて、村の人口は更に減少し

た。

「霧の蕃社」はモーナ・ルダオが仲間と離れて姿を消す十一月一日日まで、そして次男タダオ・モーナの縊死体が発見される一二月一〇日で終わっているため、「第二霧社事件」には全く触れられていない。だが、武力抵抗に走った霧社の原住民への地平の眼差しは優しい。彼らが蜂起せざるを得ない状況に追い詰められていたことに地平は同情を寄せている。

首謀者モーナ・ルダオの遺体は三年後になって発見され、標本として台北帝大の土俗学教室に運び込まれた。粗末な棺桶に収められ、無造作に床に放置されたまま、戦後は台湾大学考古人類学系となっても、一九七〇年代半ばまでそのまま放置され続けた。地平はこのモーナ・ルダオの遺体を一九三九年の台湾訪問時に見ている。



作品介绍3—「蕃界近き村」

「蕃界近き村」(『新満洲』東京・満洲移住協会、一九四〇年二月)は、台湾東部の移民村「吉野村」を舞台にした短編小説。

官営移民村として総督府が設置した「吉野村」は、その当初、土地は荒れていて開墾が進まず、甘蔗や陸稻を作っても生産高は少なく、衛生状態も悪く、マラリア等の風土病に冒され、アミ族の襲撃も受けるという危険な地域だった。

物語は次のとおり。

青年吾一は、彼を慕う蕃人の娘テウスから蕃人たちが村を襲撃する情報を聞き出す。二日後の満月の夜に小学校が焼き討ちされる計画を知った吾一は、異変を伝えに役場に走る。その夜、村の青壮年は千名近くが役場に集まり、武装を整えて各部署に出動。夜が明けると、蕃界に向けて駐在所からの山砲と、花蓮港に到着した軍艦からの威嚇砲撃が夕方まで続いた。恐れをなした蕃社が帰順を申し出たことで、村は蕃人の襲撃を免れた。吾一のお蔭だった。仲間の秘密を内地人に漏らしたことに良心の呵責をおぼえたテウスは、帰順式の行われたその日、村を出て霧社部落へ向かった。その後の行方はわからない。

その後吾一や村民全体の努力によって、吉野村は着々と改善されていき、水利灌漑は完成、土地は開墾され、大きな道路が走り、病院も建てられ、マラリアやツツガムシは絶滅、今では模範移民村となっている。吾一は婚約者ナツ子と結婚、夫婦は力を合わせて働いた結果、経済的に豊かな生活、子供に恵まれた幸せな生活を送っている。



一九〇八年のアミ族の蜂起「七脚川事件」^{チカソツワン}を背景に、移民村「吉野村」を舞台にしたこの短編小説「蕃界近き村」は、満洲への移住を推進する「満洲移住協会」の事業目的と合致する内容の作品となっている。地平は一九三九年二月に成立した「大陸開拓文学懇話会」(会

長・岸田國士)に福田清人、伊藤整、高見順、丹羽文雄ら二八人と会員に名を連ねていた。懇話会は、「大陸開拓に関心を持つ文学者達が拓務省と連携、文章報国の実を挙げよう」とする国策文学団体の一つだった。会員はそれぞれの立場で満洲開拓民をテーマにした作品、例えば和田傳『大日向村』、徳永直「先遣隊」、福田清人『日輪兵舎』などを発表していたのである。地平もまた、彼らと行動を共にして、『新満洲』に「蕃界近き村」を発表したことになる。

作品介绍4―「長耳国漂流記」

「長耳国漂流記」(『知性』一九四〇年一〇月〜四一年五月)は、琉球藩民遭難に始まり、台湾出兵を果たし、清国からの賠償を得るまでの長編小説である。地平の台湾取材旅行での最大の目的はここにあった。

一八七一年一月、宮古島の官民六九名が年貢を納めるために那覇に赴いたものの、帰途に台風に遭い台湾南部に流され、牡丹社近くに漂着した。三名は上陸時に溺死、五四名は原住民に殺され、一二名だけが生き残った。一二名は福州の琉球館に送られ、翌年六月に那覇に帰着した。「牡丹社事件」と称せられる琉球藩民漂流事件である。

日本政府はこの事件を利用して、琉球の日本帰属と台湾進出を同時に目論んだ。七二年に日本政府は福州に領事を駐在させて福建と台湾の事情を窺わせ、陸軍中佐樺山資紀と清国留学中の水野遵を密かに台湾に派遣して現地調査に当たらせた。

台湾進出を計画するなか、日本政府は牡丹社事件の責任を清国政府に求めたが、清国政府は台湾の住民は「化外の民」で、その地域は「教化の及ばないところ」として、牡丹社事件の責任を回避し続けた。

清国のこの返答を根拠にして、日本政府は七四年に西郷従道を台

湾蕃地都督、大隈重信を台湾蕃地事務局長官に任じ、台湾出兵を開始した。そして、原住民の武力抵抗とマリア等の風土病に悩まされながら六月に「蕃地」を占領、原住民を帰順させた。

これによって、清国は、日本が台湾から撤退するにあたり五〇万両を支払うこと、日本の台湾出兵は国民保護の「義挙」と認め遭難遺族に弔慰金一〇万両を支払うこととなった。

地平は素材を収集するにあたって、総督府図書館長山中樵、台北帝大文政学部教授移川子之藏、同土俗学教室宮本延人、台北高等学校教授須藤利一、高雄州恒春郡役所高橋用吉、同高士仏社警部補山野福太郎らの協力を得た。

現地調査も行い、関係者からの証言も得たことで、文献では記されていない新事実も記載されている。高士仏社で頭目と長老から聞き出した琉球漂流民鹹首の真相、樺山資紀と水野遵による現地調査の苦勞、原住民の生活習慣の詳細、原住民の武力抵抗の激しさ、マリア等の風土病による日本軍の被害など、内容豊かな作品である。史実を語る姿勢を貫いている。



『長耳国漂流記』
(河出書房、1941年6月)

作品介绍5―「花多き島」

「花多き島」(『少女画報』一九三九年一月?)は、台湾の女学校を舞台に、二人の女学生と、彼女たちが慕う教師、その教師の弟、この四人が中心となって物語は展開する。

物語は次のとおり。

佐野うららと李春蓮はP女学校の三年生。親友だったが、全校憧れの白百合先生（葉山ケイ子）の弟、一高生の昌太が冬休みに台湾に遊びに来たとき、二人の心はもつれて絶交した。うららの母親が病死し、独りぼっちになったうららへの同情から春蓮の心はとけ、二人は和解した。

春蓮は東京に戻った昌太から手紙を受け取ったが、その手紙を校庭に落としてしまった。男との文通を禁ずる学校の方針に抵触したとして、春蓮は転校を命じられ、白百合先生は学校を辞職した。

葉山ケイ子は東京に帰り、昌太と同じ家に下宿、そして雑誌社の婦人記者になった。春蓮は修学旅行で東京に行き、ケイ子や昌太と会う。春蓮は昌太から、うらら宛のプレゼントを託される。それは昌太の母の形見のブローチで、昌太がうららに蝶の採集を依頼したことへのお礼だった。だが、春蓮は、二人が親しく交際していると嫉妬して、帰りの船からブローチを箱もろとも海に投げ捨ててしまう。昌太からの手紙でブローチが春蓮に託されたことを知ったうららは、春蓮に激しい憤りを覚え、交際を断つ。春蓮はしきりに謝罪を試みるが、うららは拒み続ける。強い後悔の念に襲われた春蓮はどうとう病に倒れる。

ある時、春蓮の父親がうららを訪ねる。父親の願いでうららは春蓮を見舞う。うららが春蓮の謝罪を受け入れたことで、春蓮は快方に向かう。春蓮の両親は、「命の恩人」うららにいたく感謝する。うららは昌太に、自分の不注意からブローチを紛失したと「偽りの手紙」を出して春蓮の過ちをかばった。

女学校の卒業間近、うららは春蓮の父親から「春蓮のつきそひといふ格で、いつしよにT女専に入つてやつてはいただけないでせうか」と依頼される。旅費、学資や経費の一切は父親が

受け持つとのこと、うららが拒んだら春蓮の東京行きは諦めさせる、というものだった。その直後、雑誌社の社長に見初められてその息子と結婚したケイ子から分厚な封書が届き、T女専への入学を強く勧められる。夫の妹もとても喜ぶ、下宿代は求めない、学資も出せる、という内容だった。両親を亡くし、叔母の家に引き取られ、進学をあきらめていたうららは、春蓮の父親とケイ子の申し出に感謝し、幸福感に包まれる。

三月半ば、うららは春蓮とともに、一万トンの日丸に乗船した。旅費は春蓮の父親が負担し、下宿は白百合先生の嫁ぎ先となり、学資は台北市からの奨学金が得られた。

以上、内容の紹介が長くなったが、台湾の女学生を主人公にした小説は日本人作家ではおそらく中村地平だけのようだ。話は変化に富んでおり、魅了させられる。

この作品は一九三九年秋からほぼ一年にわたって『少女画報』に連載された。だが、残念ながら掲載誌『少女画報』を所蔵する図書館は少なく、そのため「花多き島」は一部しか見ることができない。幸いなことに、「花多き島」は、一九四六年七月に宮崎市の西部図書から『白百合先生』と改題して出版された。さらに翌四七年一月、『白百合先生』は同じく西部図書から再版された。紙型は初版をそのまま使用、ただし印刷者は初版では福岡市の間藤次郎だったが、再版では宮崎市の村川貞二に変更となっている。定価は一五円から五〇円になったのは激しい物価上昇のためだった。そして、最大の相違は、表紙絵が初版では「花に集まる多種多様の蝶」（作画不詳）だったのに、再版では塩月桃甫描く「読書する女学生」になっていることだった。

『少女画報』掲載の初出「花多き島」と比較ができずにあるが、少女小説として優れた作品であるにもかかわらず、戦前に単行本にされなかったのは、内容的に戦時体制に呼応していなかったからで

あろう。



『花多き島』



『白百合先生』初版



再版(表紙・塩月桃甫)

作品介绍6―『あをば若葉』

『あをば若葉』(博文館、一九四二年五月)は、台北高校に入学した法科、文科、医科志望の三人の高校生の友情をテーマにした書下ろしの長篇小説。

物語は次のとおり。

主人公根上太一は山陰の松江の出身。中学を卒業後、台北の高等学校(文科)に入学することになった。S氏の台湾を題材にした小説の感化を受けて、台湾への憧れが太一を台北の高等学校に誘ったのだった。

台湾に向かう船上で、太一は二、三歳年上の活発な水野町子(台北市川端町五六番地)、太一と同郷で中年の増田天風(月刊紙『興南新報』の編集局長)とも知り合う。また、同じく台北の高等学校(理科)に入学する島山久夫と知り合う。久夫は二五、六歳、台南の中学校を卒業したものの、東京で左翼運動に関係したことで年齢を重ねていた。後に、台南州知事島山久太郎の長男だということが判明する。

高校に着いたものの、寮は満員ということで、太一と久夫は淡水河近くの指定下宿(川端町三二番地)に下宿することになった。偶然なことに、町子の家の近くである。下宿には太一と同級生の平沼藤吉がいた。藤吉は台北市内(新起町)に家があるのだが、高利貸しの父親を嫌ってここに下宿することになったのだった。

夏休み、久夫は台南の自宅で退屈な日々を送っていると、増田が社屋新築の寄付をせびりに来た。父久太郎が留守だったため、久夫が応対すると、増田は台中の警察で保護検束された少年が久夫の父親を「親父」と呼んでいると言う。女中を孕ませたり、女遊びやいかわしい処へ出入りしたり、母親への暴力をする父親に対して、久夫は常々許せない思いを抱いてきた。だが、増田の脅迫に反感を覚えた久夫は増田を追い帰す。久夫がその際に「父を尊敬している」と言い放つたことを耳にした久太郎は、増田の脅迫を久夫に任せることにした。案の定、久太郎への誹謗に満ちた『興南新報』八月号が発行された。

太一は久夫を案じて、増田を訪ね、次号からの記事中止を願う。増田は「平沼社長とよく相談してみる」と返答する。社長が藤吉の父親だとわかり、藤吉の協力を得て、九月号に島山記事は一行も書かれなかった。後になって久夫は、増田から新聞記事打ち切りの顛末を聞かされる。

一月、台北高校で記念祭が開催される。記念祭初日、太一と久夫は、あてがわれた教室に「阿呆塔下」と標題を付け、豚三匹を放ち、皆の度肝を抜いた。二日目の夜、校内の大講堂で演劇が公開され、K作『順番』の主役を務めた藤吉の好演技が絶賛を博した。ところが、その翌日、藤吉は気が変になり、S脳病院に入院。いったんは快方に向かったのだが、腎臓病を併発してあっけなく息を引き取った。

太一と久夫は二年に進級。春休みに太一が帰郷すると、下関で町子の母親に呼び止められる。町子は下関の医者に嫁いたが、肺炎の病気で入院中ということだった。太一は町子を見舞うが、また寄ってほしいという町子に「一生会えないかもしれません」と邪険に答えて病室を出る。

その年の夏。日本は中国と衝突。台湾人も軍夫に志願して戦

地に赴いた。そして、久夫の弟俊二も召集されたが、夏休みの終わりごろ、母からの電話で、久夫に俊二の戦死が伝えられた。

さて、物語が始まる船上での場面、これは一九三八年八月発表の『三等船客』（初出不明、『仕事机』筑摩書房、一九四一年三月）をベースにしている。町子は、佐藤哲男「トイフェルと恋と」（『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月）に登場する女性、つまり地平が密かに恋心を抱いていた川端町の女性とイメージが重なる。

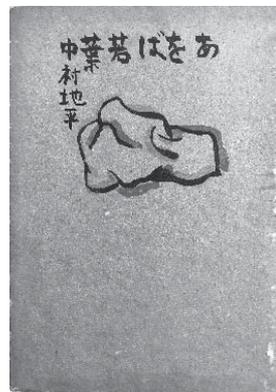
『順番』は菊池寛の作品、高校の第一回記念祭二日目での上演（一九二八年一月一七日）で、文科二年乙類の出し物、会場は鉄道ホテルだった。詳細は主役を演じた渡辺喜三郎が「記念祭演劇―『順番』の叫び声」（『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月）で述べている。

平沼藤吉は地平と交友のあった平田藤吉郎（昭和七年文科甲類卒）がモデルになっている。平田の家は台北市内の新起町に立派な邸宅があり、親は食料品店を営んでおり相当の資産家だった。尋常科から進学した平田は美少年、ナルシズム的な傾向もあり、一風変わった少年だった。常識から外れた行動も多く、その傾向は年々ひどくなり、京都帝大に進んだものの、神経衰弱的な故障で若くして亡くなった。鈴木四四太郎（昭和八年文科乙類卒）「夭折した平田藤吉郎君」（『台北高等学校』蕉葉会、一九七〇年一二月）に詳しい。

記念祭での豚の一件は、この第一回記念祭のことだった。文科一年乙類の教室展示で教室に豚三匹を入れ、文官帽をかぶせて「阿呆塔下に充満する此の臭気」と名付けて総督府官僚を揶揄したことが、総督府をいたく怒らせた。教室は豚の糞尿で悪臭が立ち込め、記念祭が済んで一週間経っても臭いは残り、さすがの三澤糾校長も顔をしかめていた、という。「座談会・三澤糾先生を偲ぶ」（『蕉葉集』蕉葉会有志、一九六六年五月）で、これに関係した長谷川光雄が語っている。このクラスには岸田實（後に国会図書館館長、財団法人台

湾協会理事長）や陳新安（陳建忠副總統の父）などがいた。高校生の暴走を咎めなかったため、これも三澤校長左遷の一つと言われている。

地平は一九四一年一二月に陸軍報道班員としてマレーに派遣されたが、『あをば若葉』は従軍前に書かれたようだ。おそらく、「花多き島」の連載が終了するころから、次の連載小説として執筆に取りかかったと思われる。だが、掲載先が決まらず、そうこうしているうちに太平洋戦争となり、内容が戦意高揚にそぐわないため、雑誌連載の機会を逃したと考えられる。幸いなことに、博文館から書下ろし長編小説として、一九四二年五月に出版された。



『あをば若葉』



『太陽の目』
(収録：『あをば若葉』)

『あをば若葉』は戦後になって、『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）に収録された。再録するにあたって、地平は「まへがき」で次のように語っている。

「長篇『あをば若葉』は、数年まへに書きおろし、東京の博文館から上梓したが、戦争ちゆうだつたために、書くことをはばかつたところもあり、また削除されたところもあつた。それらをこんど改めて手をいれ、定稿にするつもりで、一本にまとめた。」

地平が書くことを憚った、また検閲で削除された伏字箇所（傍線部分）は、例えば「台湾は）官吏がやけに威張つてゐるところ」（久夫は）左翼の運動に関係したりしてゐた」（警察に保護

検束された台湾人少年は）台湾独立の運動の一味に加わつてゐた」
「俗称阿呆塔とよばれてゐる総督府の大きなどつしりした建物」等
である。

六 地平にとっての台湾

中村地平は一九四四年三月に一家をあげて宮崎に疎開、再び東京に戻ることはなかった。そのため、中央文壇との関係がどうしても希薄にならざるを得ない。戦後は宮崎県内の社会教育、文化活動に積極的に参画、四七年から五七年まで宮崎県立図書館の館長を務め、五七年から宮崎相互銀行取締役、六一年に社長（六二年）に就任、六三年に五五歳で亡くなった。多忙を極めていた地平だったが、この間に四八年からは結核で長い療養生活も送っている。

そんなわけで、地平の著書は二四冊と数多いとは言えないが、そのうち台湾を題材にした著書（○で表示）はその半数以上の一五冊を占めている。

空襲を避けて宮崎に疎開するまでの東京生活で出版した地平の著書は次の一冊である。だが、それは全て台湾そのもの、あるいは台湾を含む作品集である。

東京在住時代の著書

- 『旅さきにて』（版画荘、一九三七年十二月）
- 『熱帯柳の種子』（版画荘、一九三八年三月）
- 『戦死した兄』（竹村書房、一九三九年一月）
- 『蕃界の女』（新潮社、一九四〇年五月）
- 『小さい小説』（河出書房、一九四〇年八月）
- 『陽なた丘の少女』（人文書院、一九四〇年十二月）
- 『仕事机』（筑摩書房、一九四一年三月）
- 『長耳国漂流記』（河出書房、一九四一年六月）

○ 『台湾小説集』（墨水書房、一九四一年九月）
○ 『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）
○ 『船出の心』（文林堂双魚房、一九四三年一月）
宮崎に疎開してから出版した著書は次の二三冊で、そのうち台湾に関する著作は四冊である。

宮崎へ疎開後の著書

- 『マライの人たち』（文林堂双魚房、一九四四年三月）
 - 『愛のある眺め』（大阪・大鏡閣書店、一九四四年六月）
 - 『日向』（小山書店、一九四四年六月）
 - 『河童の遠征』（翼賛出版協会、一九四四年十二月）
 - 『白百合先生』（宮崎・西部図書、一九四六年七月）
 - 『白百合先生』（宮崎・西部図書、一九四七年一〇月再版）
 - 『河童の遠征』（宮崎・菊書房、一九四七年十二月）
 - 『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）
 - 『義妹』（小山書店、一九四八年九月）
 - 『陽なた丘の少女』（奈良・養徳社、一九四八年十二月）
 - 『日向民話集』（宮崎・日向文庫刊行会、一九五四年六月）
 - 『卓上の虹』（宮崎・日向日日新聞社、一九五六年六月）
 - 『日向』（角川書店「角川文庫」、一九五七年七月）
 - 『白百合先生』二種（宮崎・西部図書、一九四六年七月／一九四七年一〇月再版）の初出は『少女画報』一九三九年から連載された「花多き島」。「太陽の目」（宮崎・西部図書、一九四八年一月）は、長篇小説「あをば若葉」の削除箇所等を補填した改定稿、及び『台湾小説集』や『小さい小説』に発表した原住民伝説がそのほとんど。
 - 『陽なた丘の少女』（奈良・養徳社、一九四八年十二月）も既に単行本掲載済みの「陽なた丘の少女」「土籠どももぼつくり」「南方郵便」「蕃界の女」「熱帯柳の種子」五編の作品集。
- 残る九冊のうち、陸軍報道班員としてマレーに派遣されての体験

で纏めた『マライの人たち』（文林堂双魚房、一九四四年三月）を除くと、後は宮崎に関する作品、また家族に関する作品となる。戦後は中央文壇との縁も遠ざかり、東京での出版もぐっと少なくなっていた。

結局、地平の作品の舞台は、宮崎疎開以前は「土龍どんもぼつくり」「南方郵便」といった南九州を扱った作品はあるものの、ほとんどが台湾である。以上のことからしても、地平にとって台湾は最も大きな存在だったことになる。中村地平文学を支えてきた原点は台湾だったことになる。台湾が日本統治から解放されたにも関わらず、『白百合先生』一種、『太陽の目』、『陽なた丘の少女』といった台湾に大きく関わる作品を出版するところに、地平の台湾への捨てがたい思いの強さが感じられる。

七 中村地平の不可解な言動

(一) 中学卒業後の一年間

中村地平が台湾の高等学校に入学したのは宮崎中学校を卒業した翌年、一九二六年だった。台湾の高等学校に入学するまでの一年間、地平の動向が気になる。

「中村地平年譜」（『中村地平全集3』、一九七一年七月）には「この年（一九二五年）上級学校に進まず、入試準備のため一時期福岡の予備校に遊学」とある。一般的には中学校を卒業すれば上級学校（高等学校や高等商業学校など）を受験すると考えるのだが、「上級学校に進まず」という表現からは地平に進学の意思がなかったように読み取れる。地平はなぜ上級学校に進まなかったのか。地平は高等学校受験をしなかったのか。受験したとして、不合格だったのか。合格したが入学を辞退したのか。

また、「入試準備のため一時期福岡の予備校に遊学」とあるが、

受験勉強するために予備校に通うことが「遊学」という軽微な表現になっていることにも疑問を覚える。

(二) 台北高校受験の動機

台湾の高等学校をわざわざ受験した理由にも、判然としないものがある。地平は佐藤春夫の台湾を題材にした作品を読んで台湾に憧れた、ということ各所で述べている。また、受験科目に不得意な数学がなかったことも台北高校受験の理由に挙げている。

だが、九州には第五高等学校（一八八七年創立、熊本）、第七高等学校造士館（一九〇一年創立、鹿児島）、佐賀高等学校（一九二〇年創立）、福岡高等学校（一九二二年創立）と、官立の高等学校が四校と比較的多いと言える。長崎には長崎高等商業学校（一九〇五年創立）もある。宮崎県には、大分県とともに高等教育機関はなかったため、進学するには他県にある高等学校を受験するしかない。それにしても、宮崎から門司まで一二時間の列車の移動は我慢するにしても、門司から更にまる二日の船旅をかけて、親類縁者も知人もいない不案内な土地、しかも新設の高等学校にわざわざ入学するだろうか。更に、台北高校に入学しても、この時点では、台湾には進学する大学がない。台北帝大は第一回高等学校卒業生の年に開学したのだから。

受験科目に数学がないということならば、佐賀高等学校も同じで、文科受験生には数学が課せられてなかった。地平は「中学生のころ、僕は漱石の『草枕』を愛読し、熊本の高等学校に入りた」と考えた」（『熊本と兄、随筆集『卓上の虹』日向日日新聞社、一九五六年六月）とある。地平は五高志望を捨て、佐賀高等学校も考慮に入れず、新設間もないだけに入学しやすい福岡高等学校（一九二二年創立）でもなく、台湾の高等学校を選択したことになる。

それだけ佐藤春夫からの影響が大きかったことになるのだが、佐

藤春夫の作品のどこに地平は魅力を感じたのであろうか。地平はそのことについてはつきりと具体的に述べていない。

「魔鳥」（『中央公論』一九二三年一二月）は原住民伝説に取材した小説ではあるが、場所は台湾であると述べていないものの、軍隊による原住民討伐を批判した内容である。小説「霧社」同様に、台湾に憧れる要素はない。また、「女誠扇綺譚」（『女性』一九二五年五月）は女性誌に発表された作品のため、書店で購入するにしても、図書館で借り出すにしても、恥じらいがあつて躊躇うと思うのだが、地平はどういう手段を講じてこの作品を読むことができたのであろうか。

マラリアにかかることのある、時にコレラ等の伝染病も発生する、生水は飲めない、とにかく衛生状態の悪い台湾に行くことは両親も賛成しかねたことだろう。地平自身も、最後まで台湾行きをためらっていた。「いよいよ出発の日が近づいてくると、遠い、誰も知人のいない南海の島に、独りで旅立つことが、次第に心に臆しはじめてきた。それに、そのごろ、僕はひどい神経衰弱にかかつてゐた」とあり、出発前夜、父親に愚痴を漏らしている。父親は地平を門司港まで見送ってくれたが、「父と一緒に帰りたい気もちも僕には強かつた。しかし、少年の自尊心で、それを口にすることもできなかつた」とあり、いよいよ船が岸壁を離れる時には「観念したやうに、僕は座席へ戻り、畳の上に横になつた」「眼をつむつて、いつまでも僕は父の後姿を追つてゐた」（『南方への船』、随筆・評論集『仕事机』筑摩書房、一九四一年三月）と回想している。

地平が内地の高等学校でなく、あえて台湾の高等学校への進学を決意した経緯は、佐藤春夫の小説への共感からであつたことは間違いないが、未知の世界への憧れが先行していたのではないか。

（三）長篇小説『あをば若葉』の謎

長篇小説『あをば若葉』（博文館、一九四二年五月）が、戦後になって改稿のうえ『太陽の目』（宮崎・西部図書、一九四八年一月）に定稿として再録されたことは既に述べたとおりである。

しかし、『太陽の目』に再録する際、地平は小説の最後部分、つまり日本と中国の衝突、日本人の応召、台湾人の軍夫志願に関わる話を全面的に省いた。重要な事項であるにも関わらず、この件に関する説明は『太陽の目』の「まへがき」に全く書かれてない。確かにこの最後部分は、台北高校高等科時代の学校生活を描いた作品としては座りが悪い。違和感を覚える。しかも、雑役に従事するために日本軍に加わる台湾人軍夫の採用は一九三七年からであつて、一九二八年前後の台湾を舞台にしたそれまでの話からいきなり一〇年先も飛んでいるのは歴史事実と大きく異なっている。

『あをば若葉』を出版するにあたって、地平はなぜ、こんな小細工をしたのだろうか。もしかすると、検閲で削除された箇所があつたと同様に、『あをば若葉』を出版するにあたってこれを継ぎ足すことを受け入れざるを得なかつたのかも知れない。

おわりに

地平は生前に多くの原稿や書信を庭先で焼却したと、玲子夫人が『地平という雲』（NHK、二〇〇二年六月七日放映）で証言している。それらが処分を免れていたならば、いくつかの事実が判明できるのだが、残念である。

だが、小松孝英監督によるドキュメンタリー映画「中村地平」の完成で、地平が宮崎県内のみならず、日本全国そして台湾でも広く知られるようになった。小松孝英監修『中村地平短編小説集』（黒潮文庫、二〇二四年六月）が出版され、あらためて地平作品が読め

ることになった。その結果、中村地平が再び脚光を浴びることとなった。

これを機会に、中村地平研究が深化していくことで、幾点かの謎が解明されることを願ひ、地平文学への理解がより一層深まることを期待したい。